

水田長隣加點詠草(上)

神作研一

解題

本稿は、元禄期の上方地下歌人水田長隣(生没年、享年ともに未詳)による添削資料二三点の影印と翻印である(すべて岐阜県富加町郷土資料館現蔵)。その歌学については、別稿を用意しているので、ここには資料編として本文を紹介したい。ただし、分量が多いために一括掲載を見送り、今号(上)と次号(下)の二回に分載する。今号には、ひとまず次の六点を年次順に配列して、A〜Fの記号を付した。書誌的概要は次の通りである(アルファベット次段()内の算用数字は『美濃加治田 平井家文藝資料分類目録』の通し番号)。

A (379) 冬音和歌五十首

* 12 / 95。

* 正徳五年春、水田長隣点(五〇代後半)。

継紙一通。縦一五、三糰×横三八七、九糰。楮紙(総裏打)。

冬音詠。実ハ五一首アリ。奥書「僻案愚墨三十一首之内／

B (380) 副雄等和歌三十首

* 12 / 91。

長五首／長隣(茶文鼎印「盈／細」)。端裏(後書)「長隣加筆正徳五末ノ春」。

* 正徳五年、水田長隣点(五〇代後半)。

継紙一通。縦一五、三糰×横二五〇、七糰。楮紙。副雄・

常観・冬音・仙庵詠。奥書「僻案愚墨三十一首之内／長二

首／長隣(茶文鼎印「盈／細」)。巻首二破レアル為ニ端

裏不明。

C (381) 冬音和歌十首

* 12 / 97。

* 享保二年二月、水田長隣点(五〇代後半)。

継紙一通。縦一五、三糰×横一五五、三糰。楮紙。冬音詠。

「付八首」ハ冬音・玄仲詠。奥書「僻墨十一首之内／長二

首(茶文鼎印「盈／細」)。端裏(朱後書)「享保二酉春二

月水田不遠斎加筆」。

D (382) 冬音和歌二十首

* 12 / 99 / 2。

* 享保二年七月、水田長隣点（五〇代後半）。

継紙一通。縦一六、四糎×横一八一、六糎。楮紙。冬音詠。

奥書「僻墨十四首之内／長二首（茶文鼎印「盈／細」）」。

端裏（後書）「丁酉夷則水田不遠齋長隣加筆」。

E (383) 冬音等和歌二十首

* 12 / 129。

* 享保二年十一月、水田長隣点（五〇代後半）。

折紙綴一冊（折紙二枚ヲ仮綴スル）。縦一四、二糎×横四

一、二糎（×四面）。楮紙。冬音・仙庵・常観詠。奥書

「僻墨十三首之内／長壹首（茶文鼎印「盈／細」）」。端書

（後書）「享保二年丁酉黄鐘十九日到着／水田不遠齋加点点」。

F (384) 冬音和歌五十首

* 12 / 177。

* 享保三年秋、水田長隣点（五〇代後半）。

切紙九枚仮綴（折紙一枚ヲ上下ニ裁断シテ切紙二枚トシ、

ソレヲ九枚重ネタモノ）。縦一五、五糎×横五九、七糎

（×九面）。楮紙。冬音詠。奥書「僻墨三十三首之内／長四

首（茶文鼎印「盈／細」）」。端書（後書）「享保三戊秋」。

BとDの本文は既に前稿にて紹介済みだが、ここに長隣加点点の全資料を一覧・掲出させておいた方が研究上有用だと判断して再録した。

なお、翻印にあたっては、見せ消ちなど添削の様子をそのまま再現することをせずに、添削の結果成立した新しい本文を原歌の次行に置くなど、おおむねこれまでの翻印方針を踏襲した。詳細は、次掲「凡例」につかれたく、また適宜影印を参照願いたい。

注

(1) 加治田文藝資料研究会編、富加町教育委員会発行、二〇〇五刊。

(2) 拙稿「元禄期歌人の添削資料」『金城学院大学論集（人文科学編）』第一巻第一・二合併号、二〇〇五・三。

〔付記〕所蔵資料の紹介を許された富加町郷土資料館に厚く御礼申し上げます。

（かんさく・けんいち 本学文学部教授）

凡例

一、影印にあたっては適宜縮小し、なお一部に原本の余白を切り継いだ。特に、折紙にしたためられたEとFについては、大きく原態に手を入れたところがある。

一、影印編・翻印編とも、和歌の頭に通し番号を付した。

一、原歌の次行に、添削後の新しい和歌本文を併記した。

一、評語は「 \wedge 」内にくるんで掲出し、適宜句読点、引用符（「」）を施した。長隣の評語に頻出する「仍——」の「仍」以下のところには、添削後の新しい和歌本文が入ると受け止められたい。

一、合点を「○」、長点を「◎」で示した。

一、「 \sim 」内は、神作による注記である。

一、漢字は、おおむね通行の字体に改めた。

一、和歌本文、評語とも、適宜濁点を付した。

一、虫損等による判読不能箇所は、□で示した。

一、誤字や脱字、仮名遣いの誤りについても原本のままとし、適宜

(ママ)と注記した。

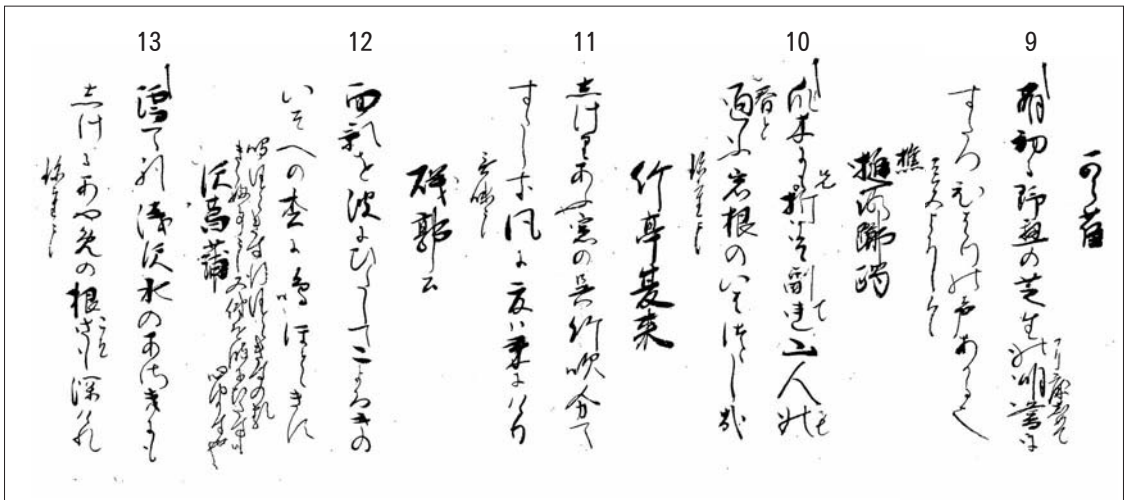
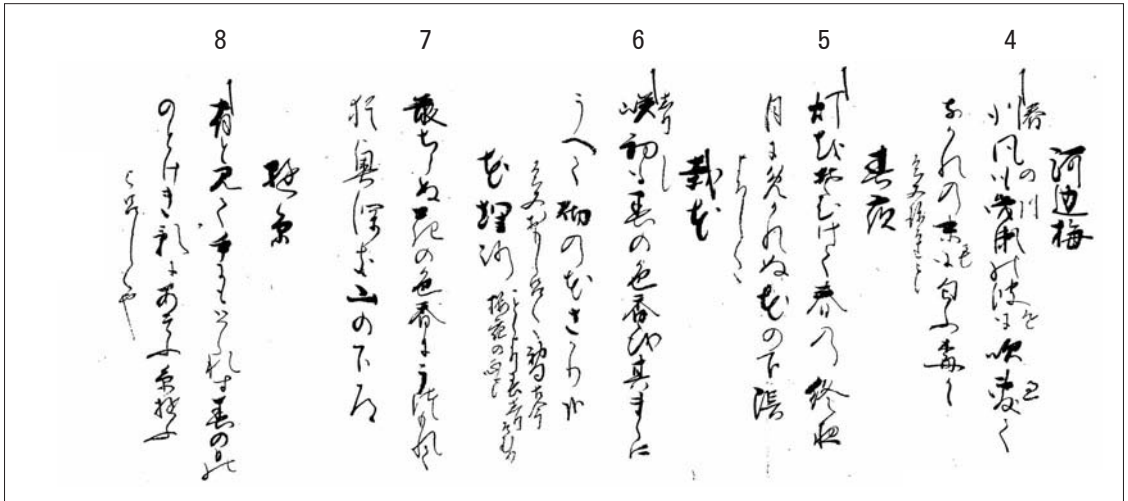
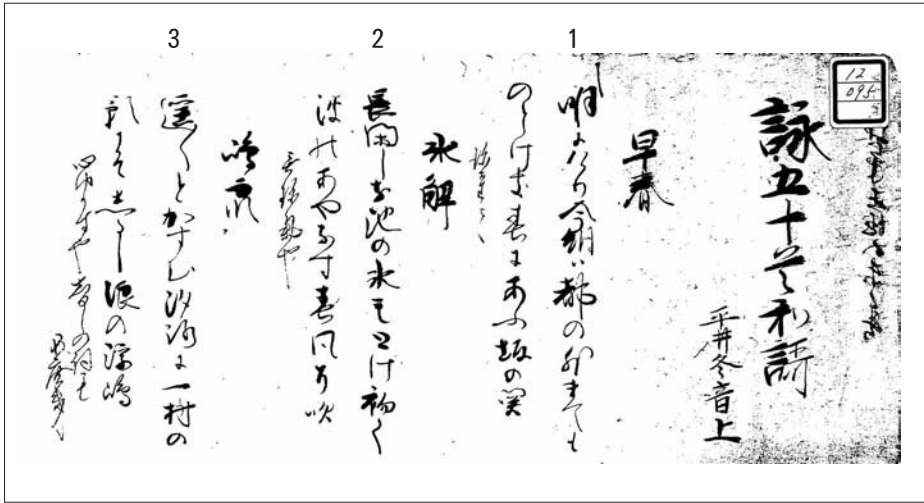
〈影印編〉

A 冬音和歌五十首

* 正徳五年春、水田長隣点。

(端裏)

正徳五年春、水田長隣点。



孟秋五日

14 一 涼は夏を来りて月を白く

リ秋は二ヶ月を盡せしもの

夏草

15 暮はたれ秋はまじき庭面

まじりたる秋は庭の夏草

樹幹

16 風そく樹のこぼれ音は

ひびくもあなねの泣声

新下歌

17 淋さく木とくは音なき

月り観外刺の下葉

新下歌

18 秋の夕は暖かき湯とよき湯や

むいせれ湯のそと

初月夜

19 けはえきききき一葉は秋の

こぼれし月天津と初月

藤浦辰

20 秋の初月を掬き流し

あきの初月半原の初

秋の初

21 初月を掬ひては初月

初月を掬ひては初月

初月

22 初月を掬ひては初月

初月を掬ひては初月

初月

23 初月を掬ひては初月

初月を掬ひては初月

初月夜

24 初月を掬ひては初月

初月を掬ひては初月

初月

25 初月を掬ひては初月

初月を掬ひては初月

初月

26 初月を掬ひては初月

初月を掬ひては初月

初月

27 初月を掬ひては初月

初月を掬ひては初月

初月

28 初月を掬ひては初月

初月を掬ひては初月

初月

33 今もやちいこれく大元
ちいこれく大元

32 市野並言
市野並言

31 洛福言
洛福言

30 早瀬川波のむらむら
早瀬川波のむらむら

29 田米
田米

38 かくもや久まけ
かくもや久まけ

37 川崎の川
川崎の川

36 水音の音
水音の音

35 浦
浦

34 人目
人目

44 下津岩根の文柱
下津岩根の文柱

43 神はマ
神はマ

42 白橋
白橋

41 由良のみ
由良のみ

40 時
時

39 草の皇
草の皇

45 又清水
 行ふは契もきよなるは
 むよよまのふりまをれ

46 玉津嶋神
 此の島やわが浦幸の玉津嶋
 先皇の神はらへり
 山原後

47 神
 神をいふまはわが浦幸のま
 いふあはれとすすらぬ
 山原後

48 山原後
 山原後
 山原後
 山原後

49 山原後
 山原後
 山原後
 山原後

50 山原後
 こと下者行はれし
 たりはたのれり物うら
 山原後

51 久世の元よ易しぬ月日
 実をいふは光りり
 山原後

山原後
 山原後

1 [破レ]
 山原後

2 山原後
 山原後

3 山原後
 山原後

山原後

B 副雄等 和歌三十首

* 正徳五年、水田長隣点。

(端裏) 巻首二破レアル為二不明

C 冬音和歌十首

* 享保二年二月、水田長隣点。

(端裏) 享保二年春二月、當不違奇詠草。

1 割あゝ今朝に夜のまきて
早春霞
平井冬音上

2 長閑日氣なれもあはれ
静見花

3 一夢に振散れはほろも
汗子題

4 昔にふれあひはくはくは
怪夜童

詠十首和詩
平井冬音上

5 夢もふ雲の磯の音ひき
海世月

6 山丹葉
六留色もちしほり夕陽日

7 池の石に氣しはるる花
朝きま

8 積れと道有山代の雲の音や
雲ふたしと池あはらうはら

9 いろにもぬ折のまきかぶる神
ぬれて来來の待理いろ

10 稀逢意
秋
秋
秋

11 雲草
いつの方に代海はつ序無音
秋
秋

12 小伝一衣の夢の門
秋
秋

13 水
水
水

14 水
水
水

詠八首
冬音上

初雪

15

色もく初雪のや 山姥ハルマハ
袖もま白き今初雪ハルマ

白きまの初雪は初雪の初雪

際も山もあめ初雪ハルマ

草もたつむよ今初雪ハルマ

初雪の初雪は初雪の初雪

雪

17

かき男も元と虎とハルマのや
らかき雪も元と虎とハルマ

初雪の初雪は初雪の初雪

18

村中ハカキと移る雪ハルマ今
巡はさりぬる遠の山ハルマ

初雪の初雪は初雪の初雪

傳書十一首之四



D 冬首和歌二十首

* 享保二年七月、水田長隣点。

(端裏) 1. 面虎別当不庭寄其作の事

歌二十首私訳

冬首和歌上



雲間郭云

1 雲間郭云 雲間郭云

中へ絶万村もは初雪ハ

江中菅浦

2 江中菅浦 江中菅浦

あむあむ天の初雪涼ハルマよ

門田早苗

3 門田早苗 門田早苗

せふふあけぬも平らハルマそ

政史照村

4 政史照村 政史照村

いさる底の目合は程と短ハルマや

の氣の余ふ心ハルマ

藤女六月雨

5

陽舟ハ古の三條に雪初ハルマ

祢賀水詩

6

河川ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハルマ

兼中燈火

7

夏草の三行も初雪ハ初雪ハルマ

毎原精川

8

消せ世美雨とら初雪ハ初雪ハルマ

池上蓮

9

赤はと玉も初雪ハ初雪ハルマ

の氣の余ふ心ハルマ

林氏輝

10 深淵小思^めの^め杏^つの^つく^かせに
本末正^まわ^るる^る 柳^のの^のま^ろろ^ろ
念^をよく^よく^よく^よ

寄初草意

11 根^ねに^には^はら^らな^な 初^{はつ}草^{そう}
た^たら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
しら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

一思草一

12 秋^{あき}ま^まに^に朽^くも^も果^はあ^あは^は 破^や脚^{けつ}
朽^くも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

一思草一

13 朽^くも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

一思草一

14 朽^くも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

一思草一

15 朽^くも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

嘆遠情

16 朽^くも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

夕思

17 朽^くも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

雲浮跡の

18 朽^くも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

旅宿夢

19 朽^くも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

赤神祝

20 朽^くも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し
あ^あら^らし^しも^もの^のま^まは^はし^し

備量十首



橋辺霞

3 川はくき流るる流るる

かきまはまの天へてり

家路ありあけ
古木の影も

行路毒

4 秋の涼ぬほひなれり通ひら

行。 志のゆはなすてあふ梅

杜梅とて、梅の白く、梅の赤く

春柳

5 昔むせり若根の岸ふ春柳

緑もゆはなす玉の宿柳

緑の宿柳

春日

6 二物とてあはれ春のあは

月、枝ふ何ゆふらん

あはれ、あはれ、他三句はあはれ

旅春雨

7 花更なるのあはれ初て

教ゆり行去雨入空

二句はあはれ、あはれ、あはれ

春帰居

8 又るほに音の三念の音

飛、鳴り雁の一行

あはれ、あはれ、あはれ

山花

9 雨敷は入白雲の白に割て

うつろひてあはれもあはれ

あはれ、あはれ、あはれ

雨也

10 雨はあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれ、あはれ、あはれ

庚辰

11 雨はあはれあはれあはれ

梅もあはれあはれあはれ

河山吹

12 山吹のあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

杜卯花

13 杜卯花のあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

里女唄

14 里女唄のあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれ、あはれ、あはれ

園郭

15

五月園をくはまの園（ホ）
にこころをまのほこまのり

五月園をくはまの園（ホ）
にこころをまのほこまのり

早苗

16

まゆみ又えり果の帆ふに
神門田并多し早苗

まゆみ又えり果の帆ふに
神門田并多し早苗

夜備

17

行はくはまの園の夜備
ぬのぬのまのまのこころ

行はくはまの園の夜備
ぬのぬのまのまのこころ

18

色尽して言まのり
高砂寺とては原友のまのり

花遊

19

消れぬまのり
まのりまのりまのり

消れぬまのり
まのりまのりまのり

藤

20

昔かて今年まのり
まのりにて秋の初月

昔かて今年まのり
まのりにて秋の初月

花

21

花はまのり
まのりまのりまのり

花はまのり
まのりまのりまのり

花

22

花はまのり
消れぬまのり

23

消れぬまのり
まのりまのりまのり

消れぬまのり
まのりまのりまのり

花

24

消れぬまのり
まのりまのりまのり

消れぬまのり
まのりまのりまのり

花

25

消れぬまのり
まのりまのりまのり

消れぬまのり
まのりまのりまのり

花

26

消れぬまのり
まのりまのりまのり

消れぬまのり
まのりまのりまのり

花

27

船中月

月夜舟中
うららかな舟中月夜うらや
かな

28

川寺

川寺
川寺のほとりには
秋の夕陽

29

持衣山

持衣山
持衣山のほとりには
秋の夕陽

30

夕陽

夕陽
夕陽のほとりには
秋の夕陽

31

彌生白

彌生白
彌生白のほとりには
秋の夕陽

32

朝雪

朝雪
朝雪のほとりには
秋の夕陽

33

竹霜

竹霜
竹霜のほとりには
秋の夕陽

34

花雪

花雪
花雪のほとりには
秋の夕陽

35

雪舟

雪舟
雪舟のほとりには
秋の夕陽

36

木雪

木雪
木雪のほとりには
秋の夕陽

37

湖雪

湖雪
湖雪のほとりには
秋の夕陽

41
 海もあつたのあはれかな
 きねんあふれいんれきして
 此初句前よりしきまの初句
 二句より

40
 初の序
 一松一
 物なびうに三すなりし
 此句は、仕向の世とて

39
 付見
 寂空意
 山乃かひふら
 いらぬおと全はか鹿にて
 寄

38
 情寂暮
 半更か
 半のりぬき言ひをふら

45
 一松一
 噴吐像
 初見と時わいつあはれ
 七と

44
 一松一
 物なびうに三すなりし
 つけぬとけの松おそや
 七

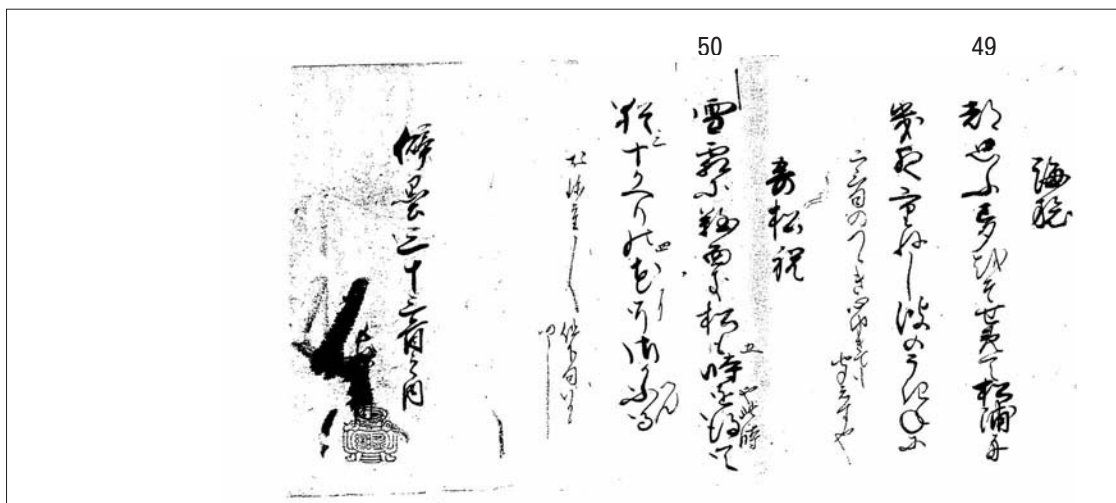
43
 一松一
 山旅
 山乃かひふら
 いらぬおと全はか鹿にて
 寄

42
 一松一
 長れぬ三ちあはれ
 寄

48
 一松一
 噴吐像
 初見と時わいつあはれ
 七と

47
 山旅
 山乃かひふら
 いらぬおと全はか鹿にて
 寄

46
 情寂暮
 半更か
 半のりぬき言ひをふら



〈翻印編〉

A 冬音和歌五十首

〔端裏〕 長隣加筆正徳五末ノ春

〔内題〕 詠五十首和調／平井冬音上

早春

1 ○明にけり今朝は都の外までものどけき春にあふ坂の関

〈珍重に候〉

氷解

2 長閑しな池の氷もとけ初て波のあやなす春風ぞ吹

〈無珍気や〉

嶋霞

3 遙くとかすむ汐路に一村の影こそしるし浪の浮嶋

〈心ゆかずや。「しるし」の詞も不庶幾候〉

河辺梅

4 川風も幾瀬の波に吹敷てながれの末に匂ふ梅が、

○春風の川瀬の波を吹過てながれの末も匂ふ梅が、

〈是又珍重に候〉

春夜

5 ○灯をそむけて春の終夜月にめかれぬ花の下陰

〈よろしく候〉

栽花

6 咲初る春の色香を其まゝにうへて砌の花ざかり哉

○しり初し春の色香を其まゝにうへて砌の花ざかり哉

〈是又おもしろく候。初句、古今「ことしより春しりそむる

桜花」の心に候〉

花埋路

7 散ちらぬ花の色香にうつもれて猶奥深き山の下道

遊糸

8 ○有と見て手にもとられず春の日ののどけき影にあそぶ糸ゆふ

〈よろしくや〉

雲雀

9 萌初る野辺の芝生の明暮にすだつひばりの声あがる也

○萌初る野辺の芝生に床しめてすだつひばりの声あがる也

〈是又よろしく候〉

槌路躑躅

10 爪木にも折こそ副れ山人の通ふ岩根のいはつゝじ哉

○爪木にも先折副て山人も春と岩根のいはつゝじ哉

〈珍重に候〉

竹亭夏来

11 しげりあふ窓の呉竹吹分てすゞしき風に夏は来にけり

〈無味に候〉

磯郭公

12 面影を波にひたしてこよろぎのいそべの松に鳴ほとゝぎす

〈「鳴ほとゝぎす」「行ほとゝぎす」の類、きらふ事に候。

又「佛を波にひた」すも心ゆかずや〉

沢菖蒲

13

濡て引浅沢水のあさきにもしげるあやめの根ざし深けれ
 ○濡て引浅沢水のあさきにもしげるあやめの根こそ深けれ
 〈珍重に候〉

幽栖五月雨

14

露にさへ覚束なきを五月雨の日数にこもる蓬生の宿
 ○覚束なむさし野ならで五月雨の日数にこもる蓬生の宿
 〈珍重く〉。但「こもる」の詞、うちまかせてはよまぬ事に
 候。伊物の本哥により候。仍——

夏草

15

春におくれ秋をもまたで庭の面のまがきの露に茂る夏草
 〈初句字余の体、二条家禁之〉

樹蟬

16

風そよぐ榎のこずへに鳴つれてひゞくもあかぬ蟬の諸声
 風そよぐ榎のこずゑに鳴つれてひゞくもあかぬ蟬の諸声
 〈初句、家隆卿秀哥、憚ある事に候。殊一、二句のつゞき、
 口伝に候〉

軒下菖

17

淋しきは所もさらず音立て風に起臥軒の下菖
 ○淋しさやいづくもおなじうき秋の風に起臥軒の下菖
 〈甘心く〉。但上句、心ゆかず候。仍——

萩半綻

18

○きのふけふ咲を錦とみやぎ野や花は半の露のはきはら

初鴈成字

19

けさ見ればまた一筆の跡なれや山飛こゆる天つはつ鴈
 ○けさ見ればまた一筆の跡なれや書もつらぬ天つはつ鴈
 〈珍重に候。但「一筆」のよせ、下に見えず候。仍——

旅泊鹿

20

○あはれさは猶こそ増れ湊江のなみの枕の竿鹿の声
 〈よろしく候〉

秋夕

21

物おもふ泪とともにころもねのつゆのうき身の秋の夕暮
 ◎何となく泪ぞしほるころもねのもりをうき身の秋の夕露
 〈甘心に候。但此題哥、人、大切にする事に候。今少無味に
 候。仍——

月前鐘

22

○光そふ月を霜成秋の夜は空にさえぬる鐘の音哉
 〈甘心く〉

月下遊士

23

諸共にうきをわすれて更る夜の月にうかる、秋のたはれお
 ◎世を秋のうきもわすれて更る夜の月にうかる、たはれおの声
 〈興ある体、珍重に候。但初句、「月」に対しいかゞ。仍——

故郷擣衣

24

露寒み猶ふる里の秋のよはたえぬ砧の音に社しれ
 ○露霜も猶ふる里のうき秋をたえぬ砧の音に社しれ

〈珍重に候〉

葛閉戸

絶はて、人も問来ぬ柴の戸はつたのかつらの閉て物うき

〈無味に候〉

秋不留

うきをかこち哀を詫し秋の日も暮につけてをしまれぞする

うきをかこち哀を詫し秋の日も暮につけてをしまれぞする

〈初句、前におなじ。下句も無味に候〉

山館冬到

いつとなく軒端の山の松風もしぐれ初つゝ冬は来にけり

○まがへ来し軒端の山の松風もつるに（マ）しぐれて冬は来にけり

〈是又珍重に候〉

落葉驚夢

窓をうつ木々のこのはに驚て猶老らくの夢ぞはかなき

〈年齢は不承候え共、「老」の字は、七十にも及たる人には

よし。打まかせては不免之〉

田氷

月ぞ猶光もそひて夜竟伏見の田井にむすぶ薄氷

〈三句、よめとかず。下句も長過候歟〉

淵水鳥

早瀬川波のひま有かた淵に羽音もしげきあしの村鳥

〈平頭病にや〉

31 すさまじき夜半の嵐も珍しとみやこにふれる今朝の初雪

○雲さえし夜半の嵐も珍しとみやこにふれる今朝の初雪

〈珍重に候〉

市歳暮

いとまなみ冬の日数も暮果て年の境にたつの市人

◎さはぐ也なにをうるとて暮果し年の境にたつの市人

〈甘心に候。但「冬の日数」は春へもかゝるものに候。仍

——。又「市」のよせなし。仍——〉

寄名所山恋

今ははやおもひこがれて大空にくゆるけぶりの富士の芝山

〈心ゆかずや〉

〔寄名所〕岡〔恋〕

涙にも朽こそ果め年月を人目しのぶの岡の下草

〔寄名所〕浦〔恋〕

ひるまなき思は蟹の袖なれやなみだとゝもにあふの浦波

◎ひるまなき思は蟹の袖なれやよればいなみの浦のあだ波

〈甘心に候。但下句、無味に候。仍——〉

〔寄名所〕滝〔恋〕

おもひ世に音羽の滝の音立て猶わきかへる水のしらあは（マ）

○うき名のみ音羽の滝の音立ておもひけぬべき水のしらあは（マ）

〈珍重——。但初句、心ゆかず。仍——〉

〔寄名所〕川〔恋〕

37 よしの川ふかき思ひの末は猶名のみいもせの中に落けり

36

35

34

33

32

31

30

29

28

27

26

25

24

23

22

21

20

19

18

17

16

15

14

13

- ◎よしの川あはぬ思ひの涙のみうしやいもせの中に落けり
 〈本哥、尤甘心に候。但つゞけがら、今少いかゞ。仍——〉
 〔寄名所〕 橋〔恋〕
- かづらきや久米の岩橋絶て今いつくの空に恋やわたらん
 〔寄名所〕 里〔恋〕
- 起臥も馴て鶉のことはにあかぬ契やふか草の里
 ○うき中もならへ鶉のことはにあかぬ契のふか草の里
 〔甘心〕。但一、二句、心ゆかず。仍——
- 〔寄名所〕 杜〔恋〕
- 時しあればつゝむ泪もくれなるにいろにぞ出る神なみの森
 ○秋にあへばつゝむ泪もくれなるにいろにぞ出る神なみの森
 〔珍重に候〕
- 〔寄名所〕 湊〔恋〕
- たえゝにおもひ乱てたちかへる由良のみなどの沖つ白波
 〔寄名所〕 浜〔恋〕
- しのびかね思ひあまりて今ははや身のうきはまに立る波哉
 〔聞なれぬ名所歟〕
- 伊勢
- 神風やいせの内外の宮柱すなをに立る惠深しな
 朽せじな下つ岩根の宮柱たちしをまゝの世々の恵は
 ○朽せじな下つ岩根の宮柱たてしをまゝの世々の恵は
 〔珍重に候〕
- 石清水
- 45 猶ふかき誓もしるや石清水むすぶ雫のにごりなければ
 ○猶ふかき誓もしるし石清水むすぶ雫のにごりなければ
 玉津嶋明神
- 46 ひろはゞやわか（マヤ）の浦はの玉津嶋光曇らぬ神にちかひて
 ○ひろはゞやわか（マヤ）の浦はの玉津嶋めぐみ曇らぬ神にちかひて
 〔右二首、とりくよろしく候〕
- 47 山家猿
 ねられじな夢もあらしの柴の戸にいとゞあはれをましら鳴声
 ○うちもねん夢はあらしの柴の戸にいとゞあはれをましら鳴声
 〔甘心に候。但うちぬる夢はあるまじとかゝれり。仍——〕
- 48 羈旅
 ○算へ見るたびのやどりの明暮にはや遠さかるふるさとの空
 〔よろしく候〕
- 49 寄草述懐
 露の身のうき事しげきことわりも風の草葉に任てぞしる
 ○露の身のうき事しげきことわりも風の草葉に任てぞしる
 〔珍重〕
- 50 寄夢懐旧
 過してし昔は猶も夢路ぞとおもふに老の数ぞ物うき
 〔是又「老」の字、前におなじ〕
- 51 寄世祝
 久堅の空に曇らぬ月日影実君が代の光なりけり
 〔第三句、聞なれず候。又「君が代」、うちまかせて只人は

よまぬ事に候

〔奥書〕 僻案愚墨三十一首之内／長五首／長隣（茶文鼎印「盈／細」）

B 副雄等和歌三十首

〔端裏〕 〔破レ〕

〔内題〕 〔破レ〕

〔暁霞〕

1 〔横雲の立とも見えず〕 打むかふ山の端いと霞増れる

副雄

〔破レ〕 打むかふ山の端ふかく霞かゝりて

〔珍重に候。但てにをは、あしく候。仍——〕

2 山の端もほの見ゆるより明初て麓の里にたつ霞哉

常観

〔「暁」の心、なし〕

海帰鴈

3 馴初の宿りも波のちへも、へ海原遠く帰るかりがね

冬音

◎ 馴初におりゐる宿も波ちへて海原遠く帰るかりがね

〔尤珍重に候。但三句、耳立候。仍——〕

4 見送れば果しもあらぬ海原を雲にかくろひ帰るかりがね

常観

○ 見送れば果しもあらぬ海原の雲の波路を帰るかりがね

〔珍重——。但下句、「海」のよせなし。仍——〕

苔上落花

5 白妙にちり埋みぬる花を今朝雪とみどりの苔の通路

副雄

〔心ふるし〕

6 風誘ふ梢の花のしら雪に苔のみどりの色も移らふ

仙庵

○ 風誘ふ梢の花のしら雪に苔のみどりも色ぞ移らふ

〔景気ありて、尤珍重に候〕

樹陰卯花

7 夏迄も木陰は雪の残るかと驚かれぬる宿のうの花

仙庵

○ 夏迄も木陰は雪の残るかと驚かれぬる八重のうの花

〔珍重に候〕

8 消残る雪と見えしも木陰に猶日数へて咲るうの花

冬音

〔下句、心ゆかずや〕

雨後蟬

9 村雨の晴行跡は雲もなき空までひゞく蟬の諸声

仙庵

○ 村雨の晴行雲の追風に空までひゞく蟬の諸声

〔物つよく、珍重に候〕

10 ○ 夕立の名残の露に鳴せみの声も涼しき衣手の森

冬音

〔一体やさしく、甘心に候〕

閑庭露

- 11 夫かとも問れぬ庭は秋草に心のまゝの露の夕暮
常観
○夫かとも問れぬ庭の秋草に心のまゝの露ぞ置ぬる
〈尤甘心に候。但結句、用捨の事に候。仍——〉
- 12 あだなりと見し世の露も今更にこゝろをみかく浅茅生の宿副雄
副雄
〈「閑」の事、眼目に候。いひおほせずや侍らん〉
- 13 澄月の影を移してみなせ川波のそこにも秋の色哉
仙庵
水郷月
〈家隆卿、「湖の海や月の光のうつろへば波の花にも秋は見えけり」。心かはらずや〉
- 14 ○眺やる水上遠く照月の光に下す宇治の柴船
副雄
〈よろしく候〉
- 15 ◎千入迄染し丹葉を分行ば袖さへ秋の色に出けり
仙庵
行路紅葉
〈珍重に候〉
- 16 ○玉鈴の道行人の袖笠も共に時雨の染る楓葉
常観
〈尤甘心に候〉
- 17 吹誘ふ音を聞にも冬の夜のあらし寂しく木葉降也
副雄
落葉
○時雨する音にまがへて冬の夜のあらしの木葉降も寂しき
〈尤甘心——。但詞つゞき、いかゞ。仍——〉
- 18 今朝見れば積る落葉に浅茅生のめ馴し庭も面替して
仙庵
○朝まだき積る落葉よ浅茅生にめ馴し庭も面替して
〈是又珍重に候〉
- 19 いつとなく枯て砌の池寒み蘆の臥葉ぞ氷閉ぬる
副雄
寒蘆
○いつとなく枯て砌の池寒く蘆の臥葉も氷閉ぬる
- 20 ○水鳥の床もあらはに三嶋江や霜枯寒き蘆の村立
冬音
〈右二首、とりくよろしくや〉
- 21 いかなれば軒端に並ぶ忍草余所めに袖の涙せくらん
常観
近恋
○いかなれば軒端並べて忍草しのびに袖の涙せくらん
〈尤甘心に候。但四句、聞なれたり。仍——〉
- 22 いひかはす蘆の中垣へだてゝもおもひは同じ軒の下草
冬音
〈上下連続せぬやうに聞え候〉
- 23 おもひせく泪の雨の折くゝに馴ていろそふ山姫の袖
冬音
仙庵
忍びあひし昔も同じ思にはなれし印と何をかはせん
〈右両首、ともに心ゆきても聞えずや。「山姫の袖」、何ゆへ^マ出たる歟。後の、初句、字あまりの上、心もいかゞ。又「し」文字三も、かしがまし〉
- 24

寄灯恋

25 窓しらく明行闇にともし火のきゆる斗の思をぞする 仙庵

○下待て明行闇のともし火のきえなでかゝる思をぞする

〈尤甘心に候。但「窓」「闇」、重畳候、いかゞ。仍——〉

待詫てひとりぬる夜の灯はもへておもひのくらき物かは 常観

待詫てひとりぬる夜の灯はもえておもひのくらき物かは

〈下句、心ゆかずや〉

故郷

27 何国ぞとさして分べき方もなし葎に閉る故郷の庭 常観

○たが住し跡と分べき方もなし葎に閉る故郷の庭

斧の柄の朽もしらず住荒て里はむかしの面影ぞなき 冬音

○斧の柄は朽るともなく住荒て里はむかしの面影ぞなき

〈右二首、とり／＼よろしく候〉

柿

29 柿垣や隔はあらじ柿葉の香を一筋に留てさゝまし 副雄

○柿垣やめぐみ隔てぬ柿葉になを万代や留てさゝまし

〈珍重に候〉

30 ○ちはやぶる神代のまゝに柿葉も采ひさしき天の香久山 冬音

C 冬音和歌十首

〔端裏〕享保二酉春二月水田不遠斎加筆（朱書）

〔内題〕詠十首和調／平井冬音上

早春霞

1 ◎雪ながら今朝は霞の衣きて春珍しき山びめの袖

〈下句など殊によろしく、珍重に候〉

静見花

2 長閑成日影なればやあやにくのころを花に染て詠めん

〈統古今の哥にむつかしくや〉

野子規

3 ◎一声に振放見ればほとゝぎす影もなつ野の末の白雲

〈後徳大寺の秀哥を思へる歟。尤甘心に候〉

深夜蛩

4 音にたてぬ思ひはいとゞ深き夜にすだくほたるぞもゆるかひなき

○音にたてぬをのが思ひも深き夜にすだくほたるぞもゆるかひなき

〈珍重／＼〉

海辺月

5 ねられじな蟹の磯屋の苦びさし影さす月に身をしかこては

〈心ゆかず候。かこちてねられずよといはねば、首尾聞えず

候。されど、二、三句もいかゞ〉

〔奥書〕僻案愚墨二十一首之内／長二首／長隣（茶文鼎印「盈／細」）

雪

17 ○かき曇る空を霞とみよしのやさながら雪もはなの白妙

〈よろしく候〉

18 村雲はかゝれど積る雪に今近まさりぬる遠の山の端

○村雲はかゝれど積る雪に今朝近まさりする遠の山の端

〈源氏を思へるにや。尤珍重〉

〔奥書〕 僻墨十一首之内／長二首（茶文鼎印「盈／細」）

D 冬音和歌二十首

〔端裏〕 丁酉夷則水田不遠齋長隣加筆

〔内題〕 詠二十首和歌／平井冬音上

雲間郭公

1 殊更に名残ぞしたふほとゝぎす雲の絶間をもらす初音は

○月ならで聞もさやけしほとゝぎす雲の絶間にもらす初音は

〈尤珍重に候。但一、二句、無味に候。仍——。本哥を以、

付墨いたし候〉

江中菖蒲

2 風かほる水のみどりも深き江になびくあやめの影ぞ涼しき

○風かほる水のみどりも深き江になびくあやめの色ぞ涼しき

〈是又珍重に候〉

門田早苗

3 せき入る水の心も外よりぞわきて門田に早苗取なり

〈心ゆきてもきこえずや侍らん〉

暁更照射

4 よる鹿の目合す程も短夜やともしの影の余所に明行

○よる鹿の目合す程も夏の夜やともしの影の空にしらみて

〈尤甘心く。但二、三句つゞき、いかゞ。仍——〉

旅舟五月雨

5 漕舟の苔のしづくに濡初てうきね侘しき五月雨の空

〈無味にきこえ候歟〉

ね覚水鶏

6 聞馴てぬるが中にも幾度かね覚しらす水鶏成らん

○聞馴てぬる宿にも幾度か夢さまさする水鶏成らん

〈珍重く。但四句、いかゞ。仍——〉

叢中螢火

7 夏草のしげきおもひのむねの火もこがれていと寄ほたる哉

〈二、三句、重畳に候歟。下句も珍気なし〉

毎夜鶉川

8 消もせめ闇よりやみの夜を籠て篝火たのむ鶉舟悲しも

○此世にも闇よりやみの夜をかけて篝火たのむ鶉舟悲しも

〈是又珍重く。但初句、心ゆかず候。仍——〉

池上蓮

9 寄波も玉かとはかり池水にこゝろをみかく露の蓮葉

○をく露は玉とあぎむく池水にこゝろも清き花の蓮葉

〈尤甘心く〉。但一首の心、落着、いかゞ。仍——。是又

本哥により候

林頭蟬

10 陰深き岡下の松の夕かぜに木末をわたる蟬のもろ声

○陰深き岡部の松の夕かぜに木末をわたる蟬のもろ声

〈景気よく、珍重に候〉

寄初草恋

11 浅からず根ざしにけりな初草のはつかにもゆる下のおもひも

○浅からぬ根ざしとをしれ初草のはつかにもゆる下のおもひも

〈上下とり合よく、甘心に候。但「けりな」、あたり所なし。

仍——〉

〔寄〕忍草〔恋〕

12 此まゝに朽も果なば故郷の軒にしのかの草の名も申し

〔寄〕思草〔恋〕

13 うら枯る尾花がもとのおもひ草おもほえずのみいろに出らん

○とへかした尾花がもとのおもひ草いろには出ぬ露の乱を

〈甘心く〉。但下句、心ゆかず候。仍——〉

〔寄〕下草〔恋〕

14 わりなしやうき名はよそにもる山のしぐれも染ぬ松の下草

○つれなしやうき名はよそにもる山のしぐれも染ぬ松の下草

〈是又甘心く〉。但初句、そなはずや。仍——〉

〔寄〕忘草〔恋〕

15 つれもなき種や蒔けん住の江の岸根に靡く恋忘草

○つれなしやいつ種蒔て住の江の岸根の草の名にも忘れぬ

〈尤珍重く〉。但心、落着、いかゞ。仍——〉

暁遠情

16 哀しる唐土人のこゝろまでね覚もよほす袖のなみだに

〈下句、上にとりよらずや〉

夕幽思

17 物おもひに猶も立まふ浮雲の夕をいとふ行末の空

○何となく立まよふ空の浮雲に夕はいとど物をこそおもへ

〈是又珍重に候。但つゞけがら、いかゞ。仍——〉

雲浮野水

18 ○立ぬるゝすそのゝ水の草がくれ行かふ雲も影をひたして

〈下句、少ふるめかしけれど、及点候〉

旅宿夢

19 草枕結びもはてず故郷は夢にも猶や遠ざかるらん

〈「夢」の字歟。「夢」の字、題書に見えず。題の文字には

異体なし〉

寄神祝

20 治れる代々のめぐみは行末もかけてぞ思ふ神の白木綿

○治れる代々のめぐみに行末をかけてぞ思ふ神の白木綿

〈よろしくきこえ候〉

〔奥書〕 僻墨十四首之内／長二首（茶文鼎印「盈／緇」）

E 冬音等和歌二十首

〔端書〕 享保二年丁酉黃鐘十九日到着／水田不遠齋加點

〔内題〕 詠月／二十首和歌／長沼仙庵上／平井冬音上

八月十五夜

冬音

1 馴てうき秋の詠も名にたちてこよひと待し月のさやけさ

○うき秋と名にたつ空の詠めまでこよひわするゝ月のさやけさ

〈尤珍重に候。但上句、心ゆかず候。仍——〉

不知夜月

冬音

2 今よりの心づくしか山の端に影もいざよふ月におもへば

〈下、無味に候。初句もいかゞ〉

立待月

仙庵

3 足曳の山の椎柴影もれて今やいつると立待の月

○つれなしや山の椎柴影もれて今やいつると立待の月

〈是又珍重に候。但初句、用なし。仍——〉

居待月

冬音

4 物思ふ夕の露ぞ袖（マユ）にをくひとり居待の月を詠て

○物ぞ思ふとはれぬ袖の露の上にひとり居待の月をやどして

〈珍重く。但「夕」、いかゞ。居待は十八日也。仍——〉

臥待月

冬音

5 伴ん人もこすげの枕してひとり待いづる闇の月影

○かたらはん人もこすげの枕してねたくふし待闇の月影

〈甘心く。但四句、「居待」に見え候。仍——〉

二十日月

冬音

6 足柄や八重山遠く待出る影もはつかの月ぞ久しき

〈ふるめかしくや〉

禁中月

冬音

7 露は猶玉敷庭の萩の戸に光をそへて月やどるらん

○白露の玉敷庭の萩の戸に光を花と月やどりけり

〈是又珍重に候。但「猶」の字、心ゆかず。下もよはく候。

仍——〉

故郷月

仙庵

8 人だにも住うかれたる古里に隔てぬ月と影のさやけさ

○人だにも住うかれたる古里に光隔てぬ月のさやけさ

〈よろしくきこえ候〉

山家月

常観

9 淋しさをうき世にかへて山里の庭も籬も秋の夜の月

○淋しさも世のうきよりの山里に住やうかれん秋の夜の月

〈本哥、尤甘心く。但四句、古今の詞ながら心ゆかず候歟〉

田家月

冬音

10 すむもうし小田守庵の小筵に馴て幾夜か有明の月

〈いひおほせられても聞えずや〉

野徑月

冬音

11 露わくる千種の花の色くも袖にうつろふ野への月影

○露わくる野への千種の花の色に袖もうつろふ月のさやけさ

〈尤珍重に候。但三句、いかゞ。仍——〉

江上月 常観

12 風渡る入江の蘆のよるくは類ひも波にうつる月影

〈おさなく候歟〉

古寺月 冬音

13 永からんよかはの杉の木の間より雲もさはらず出る月影

○奥山のよかはの杉の木の間より雲もさはらず出る月影

〈尤甘心く。但初句、長夜の事ながら、いかゞ。仍——〉

松間月 仙庵

14 木の間もる月の光の影清く松とし秋の色に出けり

○木の間もる月の光のうつろひて松さへ秋の色に出にけり

〈尤珍重に候。但三句、重畳候。四句も心ゆかず候。仍——〉

竹間月 常観

15 風吹ば乱るゝ庭の竹の間にまかせて月の影のさやけさ

〈心ゆかずや〉

旅宿月 同

16 日数へて身をうき露の草枕結び馴ぬる秋の夜の月

〈上句、つゞけがら、いかゞ〉

月前鴈 仙庵

17 澄月の影にみだれて鳴渡る空も夜寒の衣かりがね

○澄月の影にみだれて鳴渡る声も夜寒の衣かりがね

〈珍重く〉

18 妻恋も深き山路の月影にうかれて鹿や鳴明すらん

○妻恋の鹿も山路の月影に夜たゞうかれて鳴明すらん

〈是又珍重に候。但一、二句のつゞき、いかゞ。仍——〉

月前虫 同

19 草の葉の露ともきえで永き夜を月にふりいづる鈴虫の声

〈字余り、耳に立候歟〉

20 久堅の月は真清の鏡にて曇らぬ世々を移してぞ見る

○大空の月は真清の鏡にて曇りなき世を移す久しさ

〈珍重に候。但初句、用なし。仍——〉

寄月祝 仙庵

〔奥書〕 僻墨十三首之内／長巻首（茶文鼎印「盈／緇」）

F 冬音和歌五十首

〔端書〕 享保三戌秋

〔内題〕 詠五十首和調／平井冬音上

1 寒わたる雲路たどらで天の戸のあくるひかりも春は来にけり

〈珍気なくや。「ら」「り」「る」「れ」の多は心よからず候〉

初春

三二

雪中鶯

2 山里は雪のうちより春告て声長閑にも鶯のなく

〈無味にきこえ候〉

橋辺霞

3 ○よる波の音も隔て絶くにかすみわたれる天のはし立

〈よろしくや。実の橋にあらねど、古来、橋の題によめり〉

行路梅

4 移り来ぬ垣ねがくれの通ひちも忍ぶにはあらで匂ふ梅が、

○移りけり垣ねがくれの通ひちも春に忍ばぬ袖の梅が、

〈尤珍重に候。但四句、少心ゆかずや。仍——〉

岸柳

5 苔むせる岩根の岸に春を経て緑もふかき玉の緒柳

〈結句、よまぬ詞に候〉

春月

6 物思ふ心と晴ぬ春の夜の月は袂に何やどるらん

○心空に物思はねど春の夜の月は袂に影ぞかすめる

〈尤甘心く。但一、二句、心ゆかず候。仍——。源氏に、

「ひとり月な見給ひそ。心そらなれば、いとくるし」と云々〉

旅春雨

7 旅衣やどの名残にぬれ初て日数ふり行春雨の空

〈一、二句、つゞき、如何。四句も五月雨のやうに候〉

遠帰鴈

8 見るまゝに音のみ余所に鳴かへる霞が崎の雁の一行

〈関に「雁」をよめり。名所のあしらひも上に見えず。いかゞ〉

山花

9 面影に見し白雲も日に副てかつあらはるゝ花の山のは

○白雲と見し山のはも日に副て色かあらはす花の春風

〈尤珍重に候。但つゞけがら、いかゞ。又結句も聞ならはず

や。仍——〉

関花

10 夜を籠て立る霞の関の戸も花の陰よりまだき明行

○夜を残す霞の関も白妙の花の陰よりまだき明行

〈珍重く。但「霞」は昼夜をわかずや。仍——〉

庭花

11 いつしかとあかぬ心に咲花も移ふやどの庭の春風

河山吹

12 ○山ぶきのいはぬ色しも咲出て春せきとむる井手の玉川

〈よろしく候〉

杜卯花

13 乙女子が袖にも見えて袖とるそのかみ山の杜のうのはな

〈題のもじ、如此一所によむ事、大やうきらひ申候〉

里子規

14 いとはやももらす初音は時鳥このさとにのみしのび来ぬらん

○いとはやももらす初音ぞ時鳥こはしのぶのさとに来なきて

〈珍重く。但「此里」、いひたらずや。仍——〉

岡郭公

15 ○五月闇夜も往来の岡のべにたどらで名乗るほとゝぎす哉

〈是又いひしりて聞え、珍重〜〉

早苗多

16 けふも又取こそ果ね暇なき賤が門田に多き早苗は

○けふもまだ取こそ果ね暇なき賤が門田にあまる早苗は

〈尤珍重に候。但題の表あらはにて、いかゞ。仍——〉

夜橘

17 おもほえず花立花のにほひ来てぬる夜は夢かまくらにぞとふ

〈下旬、いかゞ。一字の「か」もじは、哉の心に候〉

籬瞿麦

18 色見えて暮まがきは吹風に露をぞはらふ床夏のはな

江蛍

消ねたゞおもひ入江にこがれ来てをのれともゆる夜半の蛍は

○何事をおもひ入江にこがれ来てをのれともゆる夜半の蛍ぞ

〈甘心〜。但初句、きらひ詞に候。仍——〉

初秋

20 音かへて今年もなかなば呉竹のはやまにそよぐ秋の初風

○身にしみぬ今年もなかなば呉竹のはやまにそよぐ秋の初風

〈尤甘心に候〉

萩風

21 こと草に替りし風の音たてゝとふはさびしき庭の萩原

○こと草に替りし風の音たてゝとふもさびしき庭の萩原

〈珍重〜〉

萩露

22 乱れても下葉残さず置まゝに消こそはてね秋はぎの露

尋虫声

23 何方とたづぬる野べも暮より音にあらはれて松声のなく

○何くぞとたづぬる野べの暮より音にあらはれて松虫のなく

〈尤珍重に候〉

暁鹿

24 いかならん難面き妻も有明の月に音をなく鹿のおもひは

○いかなばかり難面き妻や有明の月に音をなく鹿のおもひは

〈本哥、尤珍重に候。但一、二句、いひたらぬ歟。仍——〉

山家月

25 いとひ入山の奥にもすみ馴て世の外ならぬ月をこそ見れ

◎いとひ入山の奥にもうしと見し世の外ならぬ月はずみけり

〈甘心に候。但三句、いかゞ。仍——〉

野径月

26 〇分行ば尾花が袖に置露も乱れて靡く野辺の月影

〈珍重〜〉

船中月

27 〇湊江やともに心もうかれ妻うきたる舟の月にうたひて

〈甘心に候〉

川霧

28 舟よばふ淀のわたりに立籠て明ぬ夜ふかき秋の川ぎり

○立籠て明ぬ夜ふかき川ぎりに淀のわたりの舟よばふ也

29 〇珍重に候。但つゞけがら、少いかゞ。仍——
擣衣幽
さだかには聞もわかれず秋風の誘へばさそふ衣打声
〇いづことは聞もわかれず秋風の誘へばそらに衣打声
〈珍重く〉。但四句、かけりていかゞ。仍——

30 夕紅葉
露時雨染てひるまに色付や夕日てりそふ峯の丹葉々
〈二、三句、俗めかし〉

31 〇秋深き匂ひは今もさだかにて残る霜夜の白菊の花
残菊匂
〈よろしく候〉

朝時雨

竹霜

32 〇今朝ははや雲の通路ふく風にしぐれて来ぬる冬の山里
ねもやらぬ軒の村竹打さやぎむすぶ霜夜の音の寒けさ
〇ねもやらぬ窓の村竹打さやぎむすぶ霜夜の音の寒けさ

池水鳥

33 寒る夜は鴨のうきねもやすからであしまに氷るこやのいけ水

〇寒る夜は鴨のうきねもやすからじあしま氷れるこやのいけ水
〈右三首、とりくゝ尤珍重に候〉

嶋千鳥

34 立さはぐ声もいつしか引塩に遠嶋かけて行千鳥哉
〇立さはぐ声もいつしか遠嶋の塩にひかれて行千鳥哉

35 〇千鳥の景氣、見るやうに候。甘心く。但三句、哥には聞
なれず候。仍——

36 〇冬枯ぬ色をも見せて降積る岡辺の松のゆきのあけぼの
松雪
〈よろしくや〉

湖雪

37 白妙の波もうづもる色見えて雪をぞ誘ふ比良の根風
「波」を「雪」と見たる心なるべけれど、「波」にはつも
らぬものなれば、いかゞ

惜歳暮

38 今更にをしむ心もとゞまらで年の日数は暮やすき空
〇あやにくにおしめど更にとゞまらで年の日数は暮やすき空
〈珍重く〉。但二、三句、いかゞ。仍——

寄雲恋

39 涙なみだに見えつる山のかひぞなきいつうき雲と余所に靡きて
〈四句、聞えがたし〉

〔寄〕煙〔恋〕

40 半天にきえても消ぬ思ひより我身をうらに立けぶりかも

〇袖の波かけても消ぬ思ひより我身をうらに立けぶりかも
〈珍重に候。但海辺のよせ、上に見えず。仍——〉

〔寄〕露〔恋〕

41 きえねたゞあふ夜はいたく乱れても残るあしたの露の命は
〈此初句、前にも出申候。きらひ詞に候。二、三句もいかゞ〉

42 〔寄〕草〔恋〕

うきをさへ共にいはねば菅の根の長かれとのみちぎる中哉
 ◎もろ共にうきは有馬の菅の根の長かれとのみちぎる中にも
 〔珍重に候。但一、二句、いひたらずや。仍——。〕菅
 のよせもなく候

〔寄〕鳥〔恋〕

よなくは遠山鳥のさのみなどはなれてつらき契成らん

〔山鳥の本説にや。いひおほせられても、きこえず候歟〕

〔寄〕枕〔恋〕

44 ○偽としらで待夜は鐘（音）の音もふけぬとつげの枕にぞ聞

〔尤甘心に候〕

暁述懐

45 うき事は仮初ながら思ひ出てね覚を時といつならひ剣

○仮初のうき事までも思ひ出るね覚を時といつならひ剣

〔甘心に候。但一、二句、いかゞ。仍——〕

閑中灯

46 よむふみに見ぬ世の友をしたひても独かゝぐる窓の灯

〔つれづれ草の心にや。いかゞ。つれづれは哥書外とて、不

□用習に候〕

山旅

47 旅衣かさなるみねの雲分て麓もおなじ山路をぞ行

○旅衣かさなるみねの雲分て岩ねふみ行山路さびしも

〔本哥、尤珍重に候。但四句、心ゆかず候。仍——〕

48 野旅

終夜露もなみだも手枕ののべをかりねの床ぞ物うき
 ○けふ幾日露もなみだも手枕ののべをかりねの床ぞ物うき
 〔尤珍重に候。但五もじ、初句には用捨に候。仍——〕

海旅

49 都思ふ夢をぞせめて松浦舟幾夜重ねし波のうきねに

〔二、三句のつゞき、心ゆきても聞えずや〕

寄松祝

50 雪霜に難面き松も時を得て猶十かへりの花ぞさかふる

○雪霜に難面き松も十かへりの花にさかへん時や此時

〔尤珍重〕。但下句、いかゞ。仍——〕

〔奥書〕僻墨三十三首之内／長四首（茶文鼎印「盈／緇」）